

るのは、果して著者の言ふ如く世人が然か考へることを好まない因習の力に過ぎないものであらうか、その點を明白にする。ところがこの書の評者の任務でなければならぬがそれには自ら別個の論文を必要とする。筆者は唯著者の立論の最後の根柢に存する「唯一の史實」の假定に多くの疑問を有ち従つて著者が啓蒙的妥協説に過ぎぬとして排斥する創建再建孰れに拘はらず唯一つの様式があるとする思想に却つて今一應反省せらるべきものがあるを思ひ、「如何に」といふことの外に、法隆寺に就いて「何が」問はるべきかといふことが新しく關心せらるべきであると考えるのである。(定價六・〇〇、東京東洋文庫發行)(柴田)

● 日本古代經濟 交換篇第二册 市場

西村 眞次 著

はやくより我國の古代史研究に没頭し、文獻を主とする研究にあきたらず、考古學、土俗學、地理學、人類學の方面にも手を染め、數多の論著を發表した篇學の土西村眞次氏は、今又宏大な規模の下に日本古代經濟の闡明を企圖し、生産消費の諸篇に先立ち、先づ、交換篇を世に問ふた。

本書は十五節よりなり、市場の發生を論じ市場址を考證し、市場の景觀、職能を説き、市場法を解説する等古代の交換經濟の姿を細叙してある。從來の諸説を充分に紹介したること、圖版十七、挿圖十一の補足的效果は如上の細叙と相俟ち後進學者のよき指針たり得るであらう。

上梓の意圖が古代經濟史の論述にあるのでなく、著者が多年早稻田學園の講義を擔當するに際して蒐集したる日本經濟資料を分類・整理・綜合し、他日人類學的視角から日本古代史を論ずる基礎となすと共に、他面史眼の燃犀な精力に富んだ年若き史家の再檢討に資せんとするにあるので、全篇力を主として史實の考證と資料の解説に注がれたことは言ふ迄もない。併し理論的主張も決して少くなく、中にも市場の咒術宗教的起原論の如きは熱意溢る、ばかりである。

書紀・風土記の所載と各地の土俗的資料に基き、イチハイツキの約と考へ、市は初め神に物を供へる儀であつたものが中程では神人に、後には人に物を與へる儀に變つたものであらうと述べ、歌垣起原説、政治起原説、餘剩貨物交換起原説等何れもが市場の起原を説き得ないことを主張する。古代史に於ける統一な咒術宗教的なものに求めるところ、近時の文化史的研究と相通するかの如く思はれる。

其他、市場の職能として、飛鳥・寧樂時代に見られる物價の人爲的調節、罪人捜査を舉げ、平安市場の業態を分明ならしめるため、これと朝鮮市場とを比較したる等興味深い意見にも接することが出来る。

出版の主旨から當然來ることかも知れぬが、平面的敘述の精細なるに比して立體的或は發展的説明があまりに物足りなくはあるまいか。望蜀のきらびがあるが、市場に表はれた支配關係時代の推移と市場等に關する精緻且明快な論斷を續篇に期待す

る次第である。(四六倍版、定價二・五〇、東京堂刊(吉田))

●多賀神社史

多賀神社社務所編

近年各地の有名な諸社寺の歴史の出版さるゝ事多きを加へ斯界を裨益しつゝあるが、今又こゝに「多賀神社史」の刊行を見るに至つた。本書は近江國犬上郡の官幣大社多賀神社の沿革を記述せるもので、最近の當社造營完成記念事業の一として、普く江湖に鎮ち神徳顯現に資せん爲の出版である。宮地直一博士監修の下に、文學士石村吉甫氏主として草案の執筆に當り、旁ら三上左明、菅原教信兩學士の助力を得て成つたものである。

先づ第一に祭神並に鎮座、社名の由來等を明かにし、奈良朝に及んで神封の寄進あり、それより漸次上下の崇敬を受けて社格の昇進し來つた消息を記してゐる。鎌倉時代に至つては社運隆昌に纏ひ、その中期以降は古文書の今日に保存せらるゝもの割合に多きが爲め、社内に氏座郡座の二座の發生を見た事、近江國に絶大なる勢力を占むる山門領に對して多賀氏が鎌倉幕府の武威を背景として永く繫を續けた事等、日本社會史上興味ある敘述を見る事が出来る。五辻宮守良親王の御祈請、南北朝からの誘引等は吉野朝時代の抗爭史を窺ふに充分であらう。更に室町時代に至つては、鎌倉時代以來久しく勢力を振ひ來つた神官兼御家人の没落に伴ひ、神宮寺不動院を上首とする社僧の活動となり全國的にその信仰を流布するに至つた如き、吉野朝時代に端を發する所の一般社務に關して協議を遂ぐる衆議機

關の著しき發展の如き、又不動院神宮寺の坊人等の亂世の間に於ける目覺しき活躍の如き孰れも現存する古文書古記録により精密に論究されてゐる。更に此時代から安土桃山時代にかけて將軍家始め六角、淺井、武田、大内、織田、豊臣諸氏の本社尊信の史實には當代武士の精神生活の一面を考へる事が出来るであらう。江戸時代に入りては、一社の基礎漸く固く、組織具はり、世々の別當は巧に公武上下の間に處し、神徳の宣揚に努めて朝廷武家藩主の保護を受け、更に一般衆庶の間に迄、所謂多賀信仰を流布せしむるに至つた狀態を述べ、他面社領の寄進、社殿の造營、祭儀、社内の紛擾等が詳記されてゐる。而して最後に明治時代に及んで、神佛分離の大改革より昭和の大造營完成に至る迄の敘述で終つてゐる。

以上の如き内容を持つ本文の外、附録として「現行年中行事」「古例祭式次第」「頭人名稱表」「社家系圖」「不動院歴代表」「社藏古文書目錄」「社藏古記録目錄」等が添加され、圖版二十枚と相俟つて、讀者の理解に資する點大なるものがある。

要するに本書は多賀神社の起源より今日に至る迄の歴史的發達を記述するに當り、神社内部の組織制度の諸問題を扱ふと同時に、常に一般時代社會の動向との關聯に於て、その觀察の立脚點を求めたと見る事が出来るであらう。それは「多賀神社史」一卷に於て日本文化史の一部門を觀るのではなく、此の書に於ても亦日本文化の發展推移の跡を辿り得るであらう。換言せば此書は著者の明確な意圖の那邊に在りしかば別として、多賀神社の變